

## 良心学の展開

—— グローバル時代の良心の探求 ——

## Overview

- ・ 「良心」概念の系譜
- ・ 良心学の展開
  - ・ 統合知としての良心
  - ・ 実践知としての良心
- ・ 良心学研究センターの取り組み

## 「良心」概念の系譜

## 西洋における「良心」

- ・ conscience ← conscientia (コンスキエンティア、ラテン語)  
= con (共に) + scire (知る)
- ・ その元になるのは συνείδησις (シュネイデーシス、ギリシア語)  
= συν (共に) + εἶδω (知る、考える)
- ・ (参考) ドイツ語 Gewissen = ge (共に) + wissen (知る)

## 誰と「共に知る」のか？

- ・ 自己の内面的な対話 (内なる他者との対話) 【自律的良心】
  - ・ ストア派 (キケロ、セネカ) —— 理性と自由に良心の根源を求める。この考えは近世以降、再度強くなっていく (デカルト、カント、ニーチェ)。
- ・ 他者と「共に知る」 【他律的良心】
- ・ 神と「共に知る」 【神律的良心】
  - ・ 中世カトリック教会 (教会の権威)、プロテスタント教会 (良心の自由、信教の自由)

## 日本における「良心」

- ・ conscienceの訳語として「良心」が最初に用いられたのはブリッジマン・カルバートソン訳『新約聖書』(1863年)において。『孟子』から取られた。(『角川新字源』)
- ・ 孟子は性善説を唱えた。日本語の「良心」も、こうした儒教思想の影響を受けている。
- ・ しかし、「良心」の思想的広がりを視野に入れるためには、「良」を一度取り除き、「共に知る」に起因する緊張関係を取り戻すべきではないか。



## 「良心」の哲学的・倫理的探求

- ・ 新島襄の影響を受けた哲学者
- ・ 大西 祝「良心起源論」、小坂国継『大西 祝選集 I (哲学篇)』岩波書店、2013年(岩波文庫)。
- ・ 良心の個人的次元と社会的次元
- ・ 良心ある国家は存在するのか？
- ・ 良心をいかに実践するのか？ 例：良心的兵役拒否



## 現代における「良心」

- ・ 自分自身を深く振り返り、「個」の強度を高める「良心」  
(内に向かう良心、個人的良心)
- ・ 共同感覚としての「良心」 (外に向かう良心、社会的良心)
- ・ 国家主導の「道德教育」と一線を画する「良心教育」  
(良心の越境的・対話的次元)
- ・ 地域・世代を超えた「共に知る」ことの実践 (良心の共同体)

## 良心学の展開

### ・ 「統合知」としての良心

- ・ 「良心」に隣接する諸概念(道德、倫理、意識、認知能力、共感、利他性、対話など)を用いながら、幅広く人間の精神と行動を研究する。
- ・ 「共に知る」ことを原義とする良心の現代的機能は、細分化した多様な学問領域を「接着剤」のようにつなぎ合わせる「統合知」。

### ・ 「実践知」としての良心

- ・ 新たな価値を広げ、社会に影響を与えていくためには、コミュニケーション能力やリーダーシップといった「実践知」が必要。☞ 「一国の良心」

## 「統合知」としての良心

## 大学および学問の歴史

- ・ ユニヴァーシティ (←universitas) の誕生 (12世紀のヨーロッパ)
- ・ 上級学部：有用な学 (神学・法学・医学)
- ・ 自由学芸学部 (Faculty of Liberal Arts)：リベラルアーツ (自由7科：文法学・修辞学・論理学・代数学・幾何学・天文学・音楽)

【参考文献】 吉見俊哉『大学とは何か』岩波書店、2011年

## リベラルアーツの復活

- ・なぜ長らく失われていたリベラルアーツが復活したのか？
- ・キリスト教世界における知の伝統と、イスラーム世界経由で再流入した古代ギリシアの知が交差し、宗教性と世俗性が緊張を帯びた出会いをなす。
- ・リベラルアーツは「哲学」（文系・理系を含む）に統合されていく。

## 19世紀のアメリカ

- ・哲学
  - ・自然哲学 (natural philosophy) → 自然科学
  - ・知識哲学 (mental philosophy) → 論理学、心理学
  - ・道徳哲学 (moral philosophy) → 倫理学、政治学、経済学
- ・conscience は興隆する道徳哲学を背景として重視された。

キリスト教

良心とは？

世俗社会（啓蒙的価値）

## グローバル時代における問い

- ・西洋における啓蒙的価値（例：人権）は「普遍的」か？
- ・西洋的価値とイスラーム的価値の対立は調停可能か。
- ・多様性、価値の多元化にどのように対応できるのか？
- ・世界は一方的に「世俗化」しているわけではない。

「実践知」としての良心

## 良心を世界に

- ・「地の塩」として生きる
- ・国策としての「グローバル人材」の育成に対して
- ・「良心」の実践者たち：富岡幸助、山室軍平、石井十次、柏木義円ら
- ・Think globally, act locally. → Think locally, act globally.
- ・良心の実践者となるために必要なビジョンと力



山室軍平



柏木義円

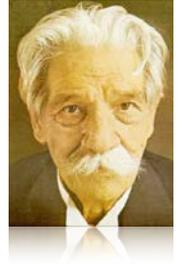
## 良心に基づく行為はすべて許されるのか？

- ・ 安住する良心、自己正当化する良心の危うさ
- ・ 他者への視線
- ・ 共感し過ぎることの危うさ
- ・ 「良心の自由」（自律的良心）の重要性

## アルベルト・シュヴァイツァー

「断じて鈍感にされてはならない。われわれが（倫理的）葛藤をいよいよ深く体験するならば、われわれは真理のなかにある。**疚しくない良心などは、悪魔の発明である。**」

（『文化と倫理』（著作集第七巻）322頁）



## 道徳教育と良心教育

- ・ 道徳の上限：日本の道徳教育は「国民道徳」を目指していた。
- ・ 良心の自由と教育（愛国心）：「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。」（憲法19条）  
【参考文献】西原博史『良心の自由と子どもたち』岩波新書、2006年。
- ・ 良心教育は、国民道徳を超えなければならない。
- ・ 教育は国家主義的なものであってはならない（→ 国際主義、原田 助）。

## 良心学研究センターの取り組み

## 良心学研究センター（2015年4月1日設立）

<http://ryoshin.doshisha.ac.jp>



## 良心を世界に

「一国の良心とも謂うべき人々を養成せんと欲す。」（設立の旨意）

## 良心を覚醒させる知の連携と知の実践

「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来たらん事を」（良心碑）

## 良心学の課題

- ・ 「良心をめぐるグローバルな思想研究」プロジェクト
- ・ ①良心の思想史的系譜：西洋および東洋由来の良心の思想史的系譜を整理し、同時に日本近代教育史の視点から、良心およびその隣接概念（道徳・倫理など）の系譜を研究する
- ・ ②グローバル社会における良心：移民・難民問題に現象化しているような、西洋社会と非西洋社会（とりわけイスラーム社会）の価値の対立をとりなすコモングッドを探索する。
- ・ 「良心の科学的実証研究」プロジェクト：人間の良心（道徳心・利他性）を育成または阻害する要因を心理学・脳科学の知見から探求し、人文社会科学との結節点を構築する。